

新年賀謹動胎鳴雷



新春川柳 乱鬼龍

イラスト
/武内 司郎

「競争こそ人類の発展」という二〇世紀の常識が煮詰まってきた。この「競争の場」を保証するために政府は何兆円単位の金を投入する。震災によって立ち上がれない人は、「競争の場」で敗北したのだから政府は公的資金をつぎ込まない。このような非常識がいつまで続くのだろう▼「市場」という競争の場では、世界を駆け巡るアナーキーな資金に満ちており、それは暴力の匂いさえただよっている。人類という生物がとんでもないことを尺度として動いているのではないか、ということが見え始めた▼DNAの発見もこの「競争の場」での展開を強いられた。遺伝子組み換え資本は生命系に脅威を与え始めた。生命を食うことによって生命が生き延びるという生命系の構造を、競争ととらえるか、共生ととらえるか、ここは分かれ目だ。

「食われる側の包容力」から何を学ぶか、人類はもうがけつづちにいる▼阪神淡路大震災は、やさしさと厳しさの共存する「生命の秩序」にそった町を出現させた。あれは幻影ではない、と今一度思い起こす。

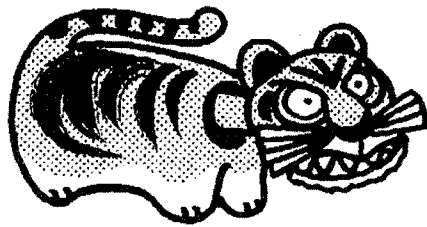
二大プロレタリア詩人、東の小熊秀雄、西の田木繁、といっても今の若い人は殆ど知らないだろう。その田木繁が一九九五年九月九日、八七才で和歌山県有田市で没。二年が過ぎて「新日本文学」一九九七年一二月号、「特集、詩人、田木繁追悼」が出た▼知人に誘われ、合評会に出席した。「お前らの手の皮と俺らの手の皮とどちらが厚いか／お前らの鉛筆と俺らの指骨とどちらが太いか／お前らの指先と俺らの喉笛とどちらが先に押しつぶれるか（後略）」代表作「拷問を耐える歌」の一節である▼しかし戦時中に「島々が動く」という詩もある。「（中略）この日本列島を形づくる大小無数の島々が一斉に動き出したならば／大編隊を構成し、南下したならば／その勢いは思い知るべく／その向かうところ敵がないであろう」（後略）

いわれる転向詩である▼戦後の詩作はほとんどないが、高校野球の勇者県立箕島高校の作詞者として、地方の文化人、大阪府立大教授笠松一夫（本名）・ドイツ文学研究者として知られる▼日本プロレタリア詩の代表詩人が東は東大卒、西は京大卒というのは、日本プロレタリアートにとって名譽なのかな不幸なのか。わが労働者としては考え込まざるをえない合評会であった。

子どもの視野の狭さは、もちろん、背の低さと生きてきた時間の短さに起因している。では、いい歳をした大人たちの、この驚くべき視野の狭さは、一体、何に因っているのか。全ての分野で、情眼を食ってきた指導者が、馬脚をあらわした一九九七年が暮れた▼流れは続くにちがいない。時代に安住し、虚構の上にあぐらをかいて来た者など、変化を感じる感性は失せ、その己が身を削る気概を持たぬのは歴史の常。ころげ落ちるが良い。叩き潰されよ▼理念なき指導者のこびへつらいが通用する時代は終わった。口先指導者の抽象論で人々が踊る時代は終わった。視野の狭い幼児性近視眼でこまかせるような時代は終わったのだ▼現実に対する批判を、己を含めたその現在への根本的批判を。テレビのスイッチを切れ、頭にスイッチを入れよ▼世界の戦場で、今日も銃を構え、地を走っている未来の指導者たちに新年の挨拶を送る。我々も又、未来の指導者たらん。

(M)

私はここに



高田 健（国際経済研究所）

平以内に（明文改憲をす
る）……」（八月二日）
（朝日新聞）と改憲の意
図を隠していない。実
際、第二次橋本内閣は三
人の閣僚のうち二人
が「改憲議連」のメン
バーなのである。

に消極的な態度をとり続けた結果である。

自民党執行部が「改憲
議連」の動きに同調しな
かったというのは、改憲

に反対だからではない。
新ガイドライン（日米臨
戦指針）と有事法制確立
への動きなどは、平和憲
法を形骸化させていると
はいえ、すでにその執
（から）さえ邪魔になる
段階にきている。

自民党の山崎政調会長は「橋本政権は改革が使命だから、憲法改正まで背負わせるとアブハチと



◆雅子の誕生日（34歳）記者会見を契機に、あらためて「人工授精を！」の声が女性週刊誌に浮上した。これが再度の「女性天皇制」論議にリンクして、この間のタブーが大々的に破られることになるのか否か？ それにしても皇太子の方の問題がなぜマスメディアで話題にならないのだろう。何かモンダイがあるのは男の方では……。 （天野恵一）
（「反天皇制運動ジャーナル」NO.5より）

味を持つているし、ひよつとしたら有機・参直をやってきた人間が自分で認識している以上のものをはらんでいるのに、軽く

「国家・民族」
タブー視の克服が必要

僕は、戦後史の中で決定的にブランクとなつてゐるのは「国家」だと思ひます。民族と国家という言葉が実はタブーになつていて、恥ずかしくて言えないこととしての国家イメージであつたら、コンセプトであつた

戦後日本の中で本当にはつきりしなければならなかつたのは、僕の言葉で言えば風土に基づく国の回復ということだつたと思う。それが敗戦を立ち直らせることだつたから。それは、決してイコール再軍備でもなければ

鍊・精製していつて、こういうことなんだよと提起しなきゃいけないのに、相変わらずPPM段階に止まっていたり、あるいは人間関係が大切で、すみたくないところで一気に浪花節に吹き飛んでしまっている。

しまつて、本当はもつと国家であつたり風土であつたり民族であつたりというところに手を入れたいといけなかつたんだけど、相変わらず戦後のタブーの中で、それはこつちに置いといて、という歴史なんじゃないかう、ヨーロッパはこう言う、あるいはアセアンはこう言う、という対応しかなできない。我々はそういう形でしか認識できていないという思想的な戦後遺症というのは、まだ続いているような気がする。

「風土としての国家」を
百姓として希求する

ただ、流行り風に言えはう風土と民族と國家と歴史を抜きにしてあり得なかつたはずだと思ひます。

僕は、政治的国家じゃなくて風土としての国家というのを、百姓やつてゐるかぎりすごく思うんですね。風土を中心とした国家、まあ国家はほとんど言葉に出さないでいいやつぱり国産がいいですね」としか言えない。それはまさに国家主義なり民族主義を唱えているんだけれども、それに対しての胸張りがない。何かいたいけないなという感

わけだし、国連というレベルで見ればそれなりの国家を形成してやつてゐるわけだから、我々が生きてゐる現実と事実をまづ認めた上で、じゃあどういう国家にするんだと



画：原伊一

も、風土というものの中に我々は生きているんだということを感じます。

でちゃんと我々日本人と呼ばれているものは日本という風土の中に生きているんですよ、ということはどういうふうに認識したらいいのか、もう一度日本史の再検討も含めてまな板の上にのせて、そ

世界のどの国家もみな自分たちのそれぞれの風土の中から出てきて国家を編成しているんだという認識みたいなものを前に出していかないと、例えば農産物の輸入問題も解決できないだろう。つまり経済合理性だけで考えたら、アメリカの方が安いし、ギャランティーもしっかりしている。

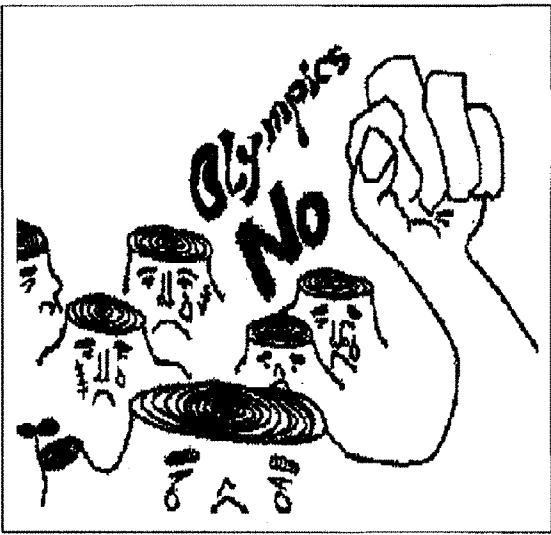
とを一番のベースに打ち立てられないのか。それは考えてみると、やっつてる奴は皆元左翼で、国家ということがアレルギーだったリタブーだったリ、民族ということに対してもそういう距離おきしかしてない連中がほとんどで、いわば体質的歴史的後遺症ということではないか。

の土台からいろんな問題、例えば農業の問題も語るべきだろうと思う。

そうでないと日本農業の究極的な救いもないし、また単なるボーダレスな時代になった産業間の問題として農業の問題を扱ってみても、これは農業問題を語ることにならないし、語ってみたとしても斜陽産業の嘆きを

ところが、当の有機農産物の購入をやっている連中そのものが、アメリカのオーガニックが参入してきたときに、「でもそれを今、やはりもう一回整理するなり吹っ切るべきです。人として生きてるかぎり風土なしに生きている人間はいない訴えることでしかないだろう。そんなお涙頂戴したくねえぞという感じがすね。

私はここに希望の光を見る!!



しかし、開催地が決定しても、市民のオリンピックムーブは盛り上がりなかつた。そこで、招致活動で「作文や絵」を書かされ利用された子どもたちの「動員」が始まった。県教育委員会は、全県の小中高等学校等へ「オリンピック一校一参加活動」を通達、文部省や県教委がつくったオリンピック読本を使い、「平和の祭典」とボランティア等の刷り込みが行われた。



◇競技場造りのために切り出された丸太の山

【オリンピックいらない2月行動】

- ・2月7日(土) 午前11時 集会とデモ
午後1時「オリンピックをぶっとばせ!!」◇会場A
- ・2月8日(日) 午前10時から市内で情宣活動
- ・2月14日(土) 午後1時「長野冬季オリンピックの環境破壊」シンポ◇会場B
- ・2月15日(日) 午後1時「オリンピック賛成体制をぶっとばせ!!」シンポ◇会場B
- ・2月21日(土) 午後1時「IOCはスポーツ・マフィア」シンポ◇会場A
- ・2月22日(日) 午後1時「さよならオリンピック! 大阪五輪反対」シンポ◇会場A

▲オリンピックいらない人たちネットワーク
〒381 長野市浅川福岡926-3 江沢正雄
TEL/FAX 026-259-6859
<http://www.ssctnet.or.jp/zui/no-olympic/>
カンパ オリンピックいらない人たちネットワーク
郵便振替 00540-5-21341

反対する奴は「非国民」「左翼アナーキスト」

一九八五年県議会は、立候補都市が決まらないうちに「オリンピック招致」を決断してしまつた。県民の知らない間に「冬季オリンピック招致」は、県民の「総意・悲願」にされていたのだ。気がついたときには、戦前から続く区(隣組)組織、職場の組織、学校教育現場を使つて、県民の数をほかに上まわす「招致署名」が集められた。招致活動は、行政・マスコミ・金融・商工会から婦人会・PTA・育成会・労組等組織と名のつく団体が招致委員会に組織された。議会も自民党から共産党まで「賛成」で、唯一人「批判」の声を上げた、今井寿一郎県議は「発言停止」等の弾圧を受けた。オリンピックに反対する奴は「非国民」「反対なら出ていけ」等

ボランティア「動員」に「自警団」結成

さらに、大会期間中の休校や有料の観客動員が待っている。観戦にはずれた学校はパラリンピック観戦が待っている。またチケットが売れないパラリンピックは、幼稚園・保育園児の団体観戦は無料ということになった。信州大学へも組織委員会からボランティア動

員が割当てられている。松本キャンパスだけで、二千人が駆り出される。県経営者協会と連合長野は、ボランティア推進幹事会をつくり、交通量削減とボランティア確保のための休業協力の要請を働きかけている。市内には「オリンピック協力会」が組織され、区組織を使って、ボランティアという名の「動員」が組織されている。

さらに、「テロ」とかいう回覧板が区組織で回され、「ビル所有者へはカギを」「車はナンバープレートが表通りから見えないように駐車を」とか、指導がされている。一方、オリンピック

オリンピックファシズムを市民の意思で断ち切る

期間中の「停戦」が国連で呼びかけられ、地雷撲滅キャンペーンが大会期間中繰り広げられ「平和の祭典」であることの証をたてようとしている。しかし、オリンピックは自然を破壊し、地域の社会・財政(市民は県と市の借金の両方で四人家族で四〇〇万円近い)を破壊し、「人間を差別・選別する」装置でしかない。国家主義・民族主義の喧伝の場ではない。オリンピック・ファシズムをつぶすのは、「市民ひとりひとり」の意志である。

二月七日からの「オリンピックいらない」二月行動へぜひ参加してください。

長野オリンピックはいいらない!

オリンピックは自然を破壊し、長野をファシズムに染めた!



◇滑降競技の会場は白馬村八方尾根に変更され、「草木一本、石ひとつ動かさない」とされた八方尾根のゴール地点一帯は砂防工事の名目で川まで新しくつくりかえられた。

情報ひろば

関東

- グループ・フリージア
委嘱学級「心の休息」
1月17日(土) 午後1時半〜3時半 / 都市と農業 / 大内力(東大名義教授) / 豊島区民センター5F音楽室ホール / 無料 / 連絡: TEL 03-3918-9334 (植村)
- 戦後世代の戦争責任を考へる / 第2弾
1月22日(木) 午後6時半〜9時 / 「日本における歴史修正主義の台頭」 / 講師: 鶴岡哲(一橋大学助教授) / 文京区民センター(地下鉄春日) / 七〇〇円 / 連絡: TEL 03-3264-4195 (国連・憲法問題研究会)
- 地震と原発・全国集会(第3回)
1月25日(日) 午後1時半〜5時 / 「アジアの安全保障を考へる」 / 講師: 福好昌治(軍事ジャーナリスト) / ドーセンター(地下鉄・天満橋) / 一〇〇〇円 / 連絡: TEL 06-6491-7757 (藤本)
- 未来が奪われる / はびこる内分秘攪乱物質
1月28日(水) 午前10時〜12時 / 「ダイオキシン編」 / 講師: 中元 / 神戸学生青年センター(阪急六甲) / ホール / 五〇〇円 / 連絡: TEL 078-8512760

関西

- 関西共同行動新年講演討論集会
1月15日(木) 午後1時〜 / 「新ガイドラインをめぐる国際・国内の動向と民衆運動の課題」 / 講師: 武藤一羊 / 弁天町市民学習センター(地下鉄・弁天町) / 一〇〇〇円 / 連絡: TEL 06-1364-0123
- 「市民は政治を変えられる」 / 市民の責任 / 政治の無責任
1月18日(日) 午後2時〜 / 講師: 辻本清美 / くらしかん(阪急豊中駅) / 五〇〇円 / 連絡: TEL 06-86516020 (小島)
- 安部・ガイドライン連続講座・最終回
1月25日(日) 午後1時半〜5時 / 「アジアの安全保障を考へる」 / 講師: 福好昌治(軍事ジャーナリスト) / ドーセンター(地下鉄・天満橋) / 一〇〇〇円 / 連絡: TEL 06-6491-7757 (藤本)
- 未来が奪われる / はびこる内分秘攪乱物質
1月28日(水) 午前10時〜12時 / 「ダイオキシン編」 / 講師: 中元 / 神戸学生青年センター(阪急六甲) / ホール / 五〇〇円 / 連絡: TEL 078-8512760

新年特集

思い切って、管理職をはじめ末組 組織に！

仲村実（管理職ユニオン関西・書記長）

銀行・証券、ゼネコン、関連企業などの相次ぐ倒産、引き続く「リストラ」解雇・人員整理、社会保障制度の改悪など、「規制緩和」「行政改革」の名のもとに進行する労働者への犠牲は、失業率の増大、一部の階層を除き雇用の不安と所得格差の一層の拡大として進行しています。と同時に、解雇や賃金不払い、労働条件の切り下げ、不利益変更、職場での嫌がらせ・いじめ、セクハラなどの問題が多発しています。

連合第五回定期大会の報告記事のなかで、『ゼンセン同盟の代議員は「労働者は労働組合の結成を求めているのか」とと強調した。地域のコミュニティユニオンや管理職ユニオンなどが活発に運動している。「なぜ連合に助けを求めずに無名の地域労働組合などに頼るのか。今の連合は未組織である」とも、

あるとともに、単なるお助けマン組合ではありません。東京管理職ユニオンは一月一日に開催された大会で、労働相談活動の実態報告から、相談窓口を管理職からパートタイマーや女性、若者などに広げた「ゼネラル・カウンスリングユニオン」（仮称）の提起をしました。

この「新ユニオン」は、自分の争議が終わっても組合活動にかかわり続けたいと組合員が思うようにならざるを得ない状況です。名称はともかく、基本的には私もこうしたい。私が目指しているのは、駆け込み寺で実践しています。

関西は、五月の結成後半年で組合員一〇〇名を突破しました。これは、四月の事務所開設・準備活動、六月の全国「職場いじめ一〇番」、一〇月の関西独自の「リストラ、解雇、職場いじめ・困りごと」電話相談活動の成果であり、多分にマスコミに取り上げられた結果でもあると思っています。

また、職場では孤立している管理職が、「組合員同士がお互いの職場の違い、いじめなどの体験の報告しあい、弱点や協力できること、これから生き方を語り合う」ということによって「癒しの場」

「元気をつける場」としての役割も果たしたと思います。

「会社人間を脱皮し、組合員一人一人が自立し、連帯するユニオン」としての組織力をつけ、目標は結成一周年の一九九八年五月中に東京からの独立（現在は支那）をとげ、相談にきた労働者が次の機会には相談者になり、交渉委員になつていくというスタイルを継承・強化していきたい。

非正規雇用形態の拡大、大動向は、リストラ、解雇、職場いじめをさらに増大していくことが想定されます。私たちも管理職にかぎらず、女性や若

年層の労働者にも対応するユニオンに大きく飛躍しなければならぬと思っています。退職者を中心とした「労働者自主事業」（仮称）を計画し、女性や若者の自立的活動を期待し、「自立・共働・連帯」として組合員自身が有給休暇の日を他の組合員の抗議行動・団体交渉などに使い参加する意識の喚起を積極的に訴えていくつもりです。

一九九八年は、自力体制をもう少し強めた上で、他労組や諸団体との連帯関係にも一歩を踏み出したい。五月一日には、管理職ユニオン・関西として、メンバーに組織的に参加することを決

「民営化」反対大合唱は 何かおかしいぞ

郵政省当局のねらいと労働者の反撃

妻鳥 紳三（大阪・高槻郵便局）

はじめに

九七年は橋本「行革」がどうなるのかという一年であった。とりわけ、郵政三事業をどうするか、経営形態を「公営」とするのか「民営」とするのか、あるいはその中間？か世論やマスコミの声はさまざまである。

しかし、郵政省当局は、もちろんの事、郵政族議員や特定局長会、さらには、全通や全郵政・郵産労働組合から郵政内部にある約四〇〇の独立系労組まですべて「民営化阻止」の大合唱である。天下り先の確保やポストのような職員づく

り、職場で始まった。丸の既得権を守ることのみに奔走していいのだから。処分・減員・強制配転・能力給「民営化」なき民営化攻撃は急速に強化されている。大合唱の胡散臭さやファッショ的体質を感じるのは私だけだろうか。

この間、郵政当局は「推奨指導標」（差別とゴマすり人間づくりの勤務評定）や、「新昇格制度」（能力給とロボット人間づくり）を策定し、労働者の結びつきを団結を破壊する攻撃を強めている。この団結破壊と強制的労働管理の横暴は、人事交流という美名の強制配転として拡大強化されている。

九七年だけでも、東京

強制配転

この間、郵政当局は「推奨指導標」（差別とゴマすり人間づくりの勤務評定）や、「新昇格制度」（能力給とロボット人間づくり）を策定し、労働者の結びつきを団結を破壊する攻撃を強めている。この団結破壊と強制的労働管理の横暴は、人事交流という美名の強制配転として拡大強化されている。

不当処分

「郵政事業活性化計画」が打ち出されて以後、合理化や強制配転だけでなく、過酷な処分弾圧も繰り返されている。プライバシーの侵害と強制的労働政策の象徴として、「氏名札」を着用しない労働者への処分と昇給カットは八年も続いている。さまざまな理由で超勤（残業）ができなかつ

1998 田中正造カレンダー

田中正造大学 群馬事務局

千370-05 群馬県邑楽郡大泉町北小泉1-20-17 関允明

TEL (FAX兼) 0276-62-9097

田中正造大学群馬事務局
千370-05 群馬県邑楽郡大泉町北小泉1-20-17 関允明
TEL (FAX兼) 0276-62-9097

論壇

メデイアの自壊が始まった

鵜戸口 哲尚

メデイアの自壊が始まった。体質からも国際競争力からも経営面からも、明らかにメデイアの自壊が始まっている。マスコミがマスコミ批判を消費することによって、言論と報道の再生産メカニズムの根本的改革を不問に付し、経営面からのみの困難の打開を図っている。書籍出版点数は年々一萬部規模

おそらく大川は朝日系のメデイアに一度はこの記事の掲載を依頼したものと十分憶測できる。朝日は井川一久を庇（かば）えるものではないと判断したのだろうか、かと言って身内を叩くのも忍びないし、ましてブロンベン特派員、サイゴン支局長、ハノイ支局長を歴任した人物のこのような不行跡を報じれば、自社の報道の信頼性までが失墜しかねないという判断するのにも不思議はないであろう。だからここで問題なのは、マスコミが自浄メカニズムを持たなければ、通俗的に色分けされている反対側に言論が行かざるを得ないという不幸が生まれるのである。

『知る権利』ではなく『知る義務』

『ボイスVOIC』(P.H.P.)は小特集テーマ・エッセイ「知る権利・知らない権利」を組んで七人のエッセイを掲載しているが、その中で宮崎哲弥が、「朝日新聞が永山則夫の逮捕時の報道では『毎日』、『産経』、NHK、TBSなどが匿名報道をしたのは対照的に、実名報道をしたことを棚上げにして、今年の神戸須磨の少年の事件では『フォーカス』批判を展開している」といふと、かかるといふ写真週刊誌の、ひいては容疑少年の「面を一目拝んでみたい」という輩の没義道を非難できない。「メデイア」という権力主体は、自らの非を認めることを極端に嫌うのが性である」と述べている。

小説『戦争の悲しみ』原文改ざん

北ベトナム軍兵士の小説『戦争の悲しみ』の原文改ざんが告発されている。改ざん例がいくつかが具体的に指摘されているが、改ざんは全編に及ぶものらしい。書き換え、書き足しなど目を覆うばかりである。改ざんの手法はベトナム政府の公認検閲官気取りである。朝日記者の井川一久が英語版から翻訳出版した元

切り出し、「ここには、近代日本の絶対的貧しさという問題が横たわっている。このような貧しさの下で、西欧諸国と競わなければならなかったという絶対的な悲しさがある。私たちはその悲しさに共感する責任の如きものがあるが、同時にその貧しさへの感涙によつて、その非を免罪してはならない」と続け、「こうした事件の起こった背景全般に、日本人の道徳的類縁、あるいは倫理的な核の不在を指摘せざるを得ない」と責任主体を日本人全体に敷衍し、「日本人が個人として確立されえないのは何故だ

スウェーデンの断種法

『中央口論』では、エイズ問題でも早くから卓見を示していた三菱化学生命科学研究所の米本昌平が、スウェーデンの断種法について「スウェーデン断種法とナチス神話の成立」を寄せている。福祉国家スウェーデンが六万人以上に断種を行っていたと、まるで鬼の首を取ったような調子で騒いでいるマスコミとマスコミ便乗型の書き手に、ナチス「優性社会」巨悪という単純な図式の落とし穴を米本昌平は懇切に

説得力のある文で実証的に警告している。また、日本とアメリカなどの断種手術の実態を指摘し、「歴史的視点から南北問題の面からも、言い換えれば、通時的にも共時的にも、今世紀を貫く優性政策の実証研究と比較研究が不可欠」と述べている。

の形成と帝国というテーマで正面に据えたのが『情況』の特集「『帝国』のアルケオロジー」である。六論文と一つの対談で構成されているが、巻頭の酒井直樹と米谷匡史の対談は、極めて啓蒙に富む必読物である。またそれを三〇年代の問題に限って焦点を当てたのが、やはりこの二人の長大な論文を含む『思想』の特集「一九三〇年代の日本思想」である。専門的ではあるが関心のある向きは是非とも手元に置くべき一冊であろう。九人の筆者のうち、少なくとも四人が三〇年代であり、外国人が二人である。若手の地道な努力と思考には頭が下がるし、酒井は今最も期待できる理論家の一人であろう。

死刑囚 永山則夫『最後のノート』

朝日新聞社の『読座』は、『死刑囚永山則夫の最後のノート』という小特集を組んでいる。「朝日」の担当記者、河出書房の担当編集者、最

紙幅が尽きるので、詳しくは触れないが、『大航海』(一九九号)の特集「父の歴史」も興味深く、大澤真幸らの八論文

ナショナリズムをめぐる議論

やはり先に触れた、『読座』に「ナショナリズムと慰安婦問題」というシンポジウムが採録されており、上野千鶴子、吉見義明、徐京植、高橋哲哉の発言を読むことができるが、今月は各誌ともナショナリズムの問題をめぐる議論が盛ん

加害者—被害者の単純な図式の危険性

加害者 被害者という単純な図式の下に、最初から被害者の側に自らの身を置いたつもりになる発想は、二重に危険である。何故なら一つには、福田らの論調を支持する土壌は、この国の未来に不安を抱き動揺している年配層の不満と、告発主義にうんざりしている若年層の気運だからである。一つには予め被害者側に立場を指定すると、加害者としての自らを無前提的に免罪し、加害者のメカニズムも、その過程での主体の変転のメカニズムも解明されず、逆に国民意識の高揚に荷担することにゆながるからである。その問題をネーション